

私の従軍記

福岡市東区 森 晴治

私は、昭和14年3月、当時日本の植民地であった台湾台北の医学専門学校を卒業すると同時に、福岡県古賀町の傷疾軍人療養所（退役軍人結核療養所）に就職し、10月に陸軍の軍医候補生として香川県丸亀歩兵第12連隊に入隊。2ヶ月間の教育を経て12月に軍医少尉任官と同時に昭和15年元旦に門司港を出帆し、台北から更に南下して高雄港から中国の広東、次いで華南の欽県からもっと奥の南寧方面に出動していた台湾歩兵第1連隊の隊付軍医として、赴任したのである。

それから丸2年間を、山野を馳け巡りながら広西省や今のベトナムのハノイ方面、あるいは海南島に駐留して作戦に従事し、やっと2年間の現役を終えてホッとしたところで昭和16年12月、あの第2次世界大戦、即ち太平洋戦争が勃発したため、1日も家に帰ることを許されず、引き続き召集されて遂に終戦までの足かけ8年間、フィリピン、ジャワ、チモール、マレー半島と転々としながら、昭和21年5月に日本の和歌山県田辺港に復員して野戦生活を終えたのである。

もちろん、軍医は非戦闘員であるから直接銃を執った経験もなく、戦闘によって傷ついた将兵の手当をその場で応急に施こし、できるだけ早く後方に送るのが任務であった。従って危険度は最も高く戦死者も極めて多かった。しかし、戦闘部隊と言っても常に戦闘を繰返しているわけではなく、時には防衛のためにある地点で陣地や道路を構築したり、移動に時間を費やしたり、食糧の補給もままならず、栄養も休養も十分には取れず、その上体力の消耗は激しく、外地での苦労は筆舌には尽くされぬほど厳しいものであった。その長い野戦生活の中から2、3を拾って記憶をたどってみたいと思う。

1. 中国南部の名もない寒村で一個中隊約150名ぐらいの兵士が本隊から2～30km離れた所に駐留していた頃の話である

私の任務は毎日、10名か20名ぐらいの兵士の診療を終えると、宣撫班といってその土地の中国住民の病人も診療していたのであるが、第一線であるから薬も衛生材料も十分には持っていない。従って軽傷の者しか治療は出来なかったが、医療の恩恵を受けたことのない山の中の集落の人達には、その当時の簡単な薬でも驚くほどの効きめがあって、むしろこちらの方が驚かされた。例えば手足の切り傷とか捻挫などは沃度チンキを塗っただけでも治ったし、日常の風とか胃炎、腸炎なども2～3日も薬を与えるとたいい治ってしまった。時には重症患者が10kmも20kmもの遠いところから籠に乗せられて運び込まれることもあったが、暫く付近の民家に寝かせて手当をしていると、みるみるうちに快復していくのは驚くばかりで、考えてみると病人というのは不思議なもので、安静だけでも治るし、ましてやこの薬を飲めば必ず治ると信じ込ませて飲ませると、精神的にも大きな効果が現れるものである。医学を学んだとい

っても、まだ学校を出たばかりの青二才の青年医師としては経験も浅く、いわば駆け出しではあったが、それだけに何にでも興味を抱いて積極的に何かやってやろうという意気込みだけは人一倍強かったので、その熱意が効を奏したのかもしれない。とにかく無料奉仕で診療してもらった患者の喜びは大変なもので、時には地酒や鶏などをお礼に持って来られて面喰らったこともある。しかし、1～2ヶ月ぐらいの、ほんの束の間の駐留であるから彼等にとっては情けなかったことと思うし、私自身も辛かったが、これはどうしようもなかった。

2. その頃の日本軍というのは、敵と遭遇しなければ昼夜兼行で歩き続けていたので、前方で弾の音がして前進がストップすると内心ホットしたが、いざ戦闘が始まると今度は必ずといってよいほど負傷者や戦死者が出るので、それから先は軍医の出番で途端に忙しくなる。殊にあまり進撃が早過ぎると、後方の衛生隊や野戦病院はどこまで来ているか見当もつかず、傷病兵を抱えて軍医は動きがとれなくなる。しかも第一線部隊は負傷者や軍医を置き去りにして、先へ先へと進んで行く。従って付近の敵に包囲されると、無力の患者集団は何の抵抗もできずに全滅してしまう場合が度々あるのである。一個大隊約1000名の兵に軍医はわずかに2名の配属で、戦線の範囲が広ければ広いほど負傷者も多く出るし、苦勞も大きかった。

殊に近代戦は銃撃、砲撃の他に空からの爆撃もあり、それだけに傷も大きく戦死者も多かった。夜は一睡もせず、食事を取らずに歩き続け、やっと昼食という時に思わぬ爆撃にあって、数十名の戦死、負傷に時間を要し、ついに食事を取ることなく再び前線に追及すると、そこにも負傷者が軍医の来るのを待ち受けていて、心身共にヘトヘトになるほど疲労困憊したが、それでも第一線では体力をふりしぼって歩兵について歩き続けねばならないのが軍医の任務であった。

一般の歩兵の兵士には、ある程度年限がくると交代ということもあったが、数少ない我々衛生勤務の者は、8年間全く交代もなく、しかも現役と違って予備役ともなると、進級はグッと遅れる。昔の軍隊には不合理な点がたくさんあったが、それでも戦死した人達のことを考えると気の毒で、生きて帰れただけでも有難いし、天祐と思って大事に生きねばと思う。

戦後50年という歳月は決して坦々たるものではなかった。敗戦と共に追われるようにシンガポール沖合いの無人島に島流しにされ、そこでの半年余りの生活は、まさに餓死寸前。栄養失調がどんなに辛いものであるかを、いやというほど知らされた。空腹も絶頂に達すると、頭だけはいやに冴えて全く眠くなくなる。そして頭の中は食べ物のことしか考えない。餓鬼とはこの時の心境であろうと思った。ほとんど汁ばかりの重湯が毎日続いた。

おもゆとは名のみの汁をすすりいし

あのけだるきは口に言いあえず

考える力もなくて飯(いい)とれば

ものをも云わず横になりけり

言の葉を口に出すさえものうくて

魂うせし人にかも似し

ほんとうに魂がなくなった人間のように、うつろな眼をして、何とも言いようのないけだるさ
だった。

国思いふたおや思い身を思い

眠れぬ夜の幾夜ありしぞ

老いの坂いたくこえます母父（おもちち）の

幸（さき）くあらせと祈（の）らぬ日ぞなき

帰る日はいつぞ帰らば何せむと

兵の話は果てしらざりき